



2025.11.9 大学 恵泉祭—恵泉祭実行委員(信和会メンバー)

あまのあ

題字・河井道
2025年度 第4号
2026年1月6日発行

街はクリスマス・イルミネーションから一気に松飾りへ移って、新年を迎えました。ヨーロッパでクリスマス休暇を過ごす時は、一月初めの一週間をクリスマスモードに浸れます。宗教の違いとはいえ、日本社会の変わり身の早さがいつにも増して思われます。戦後八〇年、戦争と平和を考えた昨年が一過性の事象の如く忘れ去られていく懸念を抱えての年明けでした。

改めて昨年を振り返れば、河井道先生が学園を創立された当時の世相の厳しさとそれを乗り越えられた偉業が思われます。

一つに、昨春、NHKラジオ「ラジオテキストが教えてくれる戦前の日本」に出演しました。一九三二年に大阪中央放送局が放送した家庭教育講座「両親再教育」の分析を依頼され、ジャーナリストの武田砂鉄さんと語り合ったのですが、子どもの発達や教育に関する当時の第一線の有識者が登壇し、「科学的知識」を基本とした子育て論を展開した講座でした。その一つひとつは今からみてもさほど相違ないものも少なくありません。問題は「科学的知識」が親の責任を強調し、一点に集約して使われていることです。さらには世界を敵にまわすとも東洋に道徳の理想郷を樹立すべく、折しも一年前に起きた満州事変を思い起こして精神を緊張させよ、といった趣旨の記述も

あつて、挙国一致で戦争へ流れることを是とする精神論が子育て論の背景に色濃く漂っています。富国強兵政策を伏線に、子を産まない女性に向けた容認し難いほどの非人道的差別的な表現もありました。

この家庭教育講座が放送された年は、犬養毅首相が暗殺され、軍部の政治的影響力が拡大した五・一五事件が起きた年です。七月には独議会選挙でナチスが第一党となり、八月にはマルキシズムに対抗する日本教学の精神的支柱建設のため「国民精神文化研究所」が文部省に

あつて、挙国一致で戦争へ流れることを是とする精神論が子育て論の背景に色濃く漂っています。富国強兵政策を伏線に、子を産まない女性に向けた容認し難いほどの非人道的差別的な表現もありました。

この家庭教育講座が放送された年は、犬養毅首相が暗殺され、軍部の政治的影響力が拡大した五・一五事件が起きた年です。七月には独議会選挙でナチスが第一党となり、八月にはマルキシズムに対抗する日本教学の精神的支柱建設のため「国民精神文化研究所」が文部省に

戦後八〇年 改めて河井道先生の偉業を思う

大学学長 大日向雅美

よって設置されています。河井先生が世界平和構築を悲願とし、そこに貢献する「自立した女性」の育成に生涯をかける決意をされたのは、まさにこうした風潮が強まりつつある最中です。時代の空気の高うさを察知する感性の鋭さ、その後戦時下の抑圧に抗いながら学園を守り抜かれた強かな胆力が改めて思われます。

もう一つ、NHKスペシャル「シミュレーション昭和16年夏の敗戦」の原作、猪瀬直樹著「昭和16年夏の敗戦 新版(中公文庫 二〇二二年)もまた、戦争突入をめぐ

る当時の状況を考えさせられるものでした。総力戦研究所という模擬内閣に集められた当時の若き俊英たちの精緻な分析に基づいた報告書には、原爆投下以外の敗戦に至るすべてが予言されていたのです。それにもかかわらず、なぜ第二次世界大戦突入を抑止できなかったのか、資料の掘り起こしと生存者への取材を通して明らかにされています。知っていて減じた。今も知ってさえない。知っていてもだめだった日本は、知らずにこ

は、けっして対岸の火事ではなく、私たちの足元にも迫ってきていると思うのは杞憂に過ぎるでしょうか。

社会に閉塞感が重く漂う中、偏狭な自己愛に陥らず、いかに多様なものを、異質なものと共存・共生を図るか、学生たちに伝えるべきことの重みとともに、河井先生が女子教育にかけた願いと祈りが鮮やかに蘇ります。己を大切にすること、それが他者のかけがえなさを尊重となり平和構築につながることを覚え、それを生涯の指標として生きる「生涯就業力」の育成を大学の教育理念の基底としてきた意義を改めて思う昨年一年でした。私たちの暮らしは時の政治経済から独立ではあり得ません。それだけに流されてはいけない不変のものを見極める冷徹な目、真理を蹂躪するものに凛として対峙する勇氣を持ち続けたいと切に願います。

昨秋の恵泉祭に学生たちが掲げたテーマは「羽ばたく」。思い煩うことなく未来に向かおうとする学生たちの勇氣は、今の多摩キャンパスの希望です。理事会の大学閉学決定を受け入れて三年。あと一年余で大方の学生が社会に巣立っていきます。本学の教育理念が学生たちの今後に確かな力となることを願います。引き続きお祈りいたします。引き続きお祈りいたします。